

# 保幼小連携を意識したワークショップの可能性の検討：参加者アンケートの結果から教員によるモデル提示の有用性を探る

著者	横井 志保, 宇野 民幸, 滝浪 常雄
雑誌名	名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇
巻	55
号	1
ページ	47-54
発行年	2018-07-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15012/00001105">http://doi.org/10.15012/00001105</a>

〔論文〕

## 保幼小連携を意識したワークショップの可能性の検討

——参加者アンケートの結果から教員によるモデル提示の有用性を探る——

横井 志保・宇野 民幸・滝浪 常雄

名古屋学院大学スポーツ健康学部

### 要 旨

平成30年4月に施行された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領には共通して、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿が挙げられた。10の姿を共通言語として、接続期である幼児教育と小学校低学年の教育を「スタートカリキュラム」を通じて各教科の学びにつなげ、子どもの姿を中心とした連携が求められている。そこで、本研究では国語科教育、算数科教育、保育内容「表現」を専門とする教員が、それぞれの専門を活かしたワークショップを行い、その参加した子どもの姿や参加者とその保護者へのアンケート結果からプログラム内容を検討した。その結果、絵本の読み聞かせを中心としたプログラムは、子どもに表現的な刺激を与え、参加する子どもの姿を通して小学校の教科教育と保育の教員がお互いの教育方法を理解することに繋がった。また、低学年の子どもたちの活動においては、保育的アプローチが有効であることが示唆された。

キーワード：保幼小連携、国語科、算数科、保育内容「表現」、保育者・教員養成

## A study into cooperation workshops among day care centers, preschools, and elementary schools

—— Exploring the usefulness of model presentation by teachers ——

Shiho YOKOI, Tamiyuki UNO and Tsuneo TAKINAMI

Faculty of Health and Sports  
Nagoya Gakuin University

## 1. 問題の所在と目的

平成29年3月に幼稚園教育要領<sup>1)</sup>、保育所保育指針<sup>2)</sup>、幼保連携型認定こども園教育・保育要領<sup>3)</sup>が一斉に改訂(定)、告示され平成30年4月施行となった。この改訂(定)では、3歳児以上の内容をできるだけ同じにするという形で示されている。また、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として10の姿を挙げ、その10の姿を共通言語として接続期である幼児教育と小学校低学年の教育を「スタートカリキュラム」を通じて各教科の学びにつないでいこうとしている。平成29年告示の小学校学習指導要領<sup>4)</sup>の総則には新たに、「4 学校段階等間の接続」の項が加えられ、教育課程の編成に当たり、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫し、「特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。」と書かれている。さらに、各教科、特別活動にも幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮するよう書かれている。

このように、幼児教育と小学校教育の学びの連続性については、子どもの姿を中心にした連携が、これまで以上に求められている。そこで、本研究では国語科教育、算数科教育、保育内容「表現」を専門とする教員が、それぞれの専門を活かしたワークショップを行い、その参加した子どもの姿や参加した子どもとその保護者へのアンケートからプログラムの内容を検討しようとするものである。また、保育者・教員養成の立場から教員が実践者となることの有用性について明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究方法

筆者らが「言葉・数量・音」ワークショップを行い、その経過をビデオ撮影し記録とした。また、ワークショップ終了後に参加者とその保護者にアンケートを実施した。これらワークショップの記録映像とアンケート結果を分析した。

対 象：午前中に学内で実施された運動プログラムに参加した小学1～2年生50名の内、本ワークショップへの参加を希望した24名  
(ワークショップに参加した兄弟姉妹についてきた幼児、3年生以上の小学生も対象とした)

実施日時：2017年12月2日(土) 13:00～14:15

場 所：音楽室(大学内)

実 践 者：国語科教育を専門とする教員、算数科教育を専門とする教員、保育内容「表現」を専門とする教員、保育者・小学校教員を目指す2年生の男子学生2名、女子学生1名

### 2.1 「言葉・数量・音」ワークショップの概要

ワークショップは午後からであったが、午前中の運動プログラムに続いての参加であったので、お

保幼小連携を意識したワークショップの可能性の検討

にぎりのお弁当を準備し、ランチタイムは学生3名が担当した。

ワークショップの概要は以下の表1の通りである。

表1 ワークショップの概要

実践の種類	題 材	実践のねらい	子どもの参加の様子	実践者
1. 素話	「おむすびころりん」	おにぎり弁当に続きワークショップの導入として聴く体勢をつくる	聴く	学生A
2. 読み聞かせ	「ねこのピートだいすきなしろいくつ」 <sup>5)</sup> 作：エリック・リトウィン 絵：ジェームス・ディーン	絵本を見るだけでなく、読み手の歌や問いかけに答えながら音楽的な参加の仕方(見方)をする	実践者が歌う絵本に載っているピートの歌に合わせて一緒に歌ったり、実践者の問いかけの読み方に応答したりしながら見る	横井
3. クイズ	訳：大友 剛 出版社：ひさかたチャイルド	絵本の内容を振り返りながら答えを導き、解答は1つではないオープンエンド <sup>6)</sup> の問題の答えを考える	数量的な観点によるクイズに答える	宇野
4. 読み聞かせ	「へんしんマラソン」 <sup>7)</sup> 作・絵：あきやま ただし 出版社：金の星社	言葉遊びとして、読み手に合わせて声を出しながら先のページの変身する姿を楽しむ	絵本の内容に沿って実践者の読む言葉に合わせて一緒に声に出しながら見て変化を楽しむ	学生B
5. 読み聞かせ	「できるかな？ あたまからつまさきまで」 <sup>8)</sup> 作・絵：エリック・カール 訳：くどう なおこ 出版社：偕成社	絵本の内容に合わせて動物の真似をしながら身体を動かして、自分の身体の動き方を知る	絵本の内容に合わせて身体を動かしながら見る	学生C
6. 読み聞かせ	「まどからおくりもの」 <sup>9)</sup> 作・絵：五味 太郎 出版社：偕成社	ページに空いた窓のしかけを楽しみながら先を考えたり、口に出して言う	窓からのぞいて見える次のページの登場人物を口々に言いながら見る	滝浪
7. リズム遊び	1拍クラップ(四分音符と八分音符)のリレー	拍を感じて他の子と息を合わせてタイミング良く拍手する 自分の順番をタイミングを計りながら待つ	円になり床に座り、課題となる四分音符(タン)と八分音符(タタ)を順番に1拍ずつ打ち、隣へ音を送る	横井
8. ミュージックベル	「きよしこの夜」	保護者や学生に手伝ってもらいながら自分の音をタイミングよく鳴らし、曲を演奏する	歌詞と階名が絵譜として書かれた楽譜を見ながら歌った後、一人1つずつ音を担当し演奏する	

## 2.2 アンケートの概要

アンケートはワークショップ終了時に配付し、翌日の運動プログラム参加時に回収した。回収率は100%であった。A3用紙の左半分を保護者、右半分を子どもに回答してもらった。

保護者のアンケート内容は、フェイスシート、参加の動機、ワークショップ終了後の子どもの様子、感想。フェイスシート以外は自由記述とした。子どものアンケート内容は、面白かったこと、もう一度やってみたいと思ったこと、その理由、感想。面白かったことはプログラムからの選択で複数回答してもらい、その他は自由記述とした。幼児は保護者に聞き取ってもらい、記載してもらった。

## 3. 結果と考察

ワークショップ終了後に保護者と参加した子どもにとったアンケートの結果と考察は以下の通りである。

### 3.1 アンケートの回答者（＝参加者）の学年の内訳と男女別人数

アンケートの回答者の学年の内訳と男女別の人数は表2の通りである。1年生15名(男児7, 女児8), 2年生3名(男児1, 女児2), 4年生1名(女児), 年長児1名(女児), 年中児3名(男児1, 女児2), 未就園児1名(女児), 合計24名であった。

表2 回答者の学年の内訳と男女別人数（人）

学年	男児	女児	合計
1年生	7	8	15
2年生	1	2	3
4年生	0	1	1
年長	0	1	1
年中	1	2	3
未就園児	0	1	1
合計	9	15	24

### 3.2 子どもが良かったと思ったことと、もう一度見たり、やってみたいと思ったこと

子どもへのアンケートにおいて「おもしろかったこと、たのしかったこと、きにいったこと、よかったとおもったこと」の全てをプログラムから選択し回答してもらった。子どもが良かったこととして選択した数の多いものから順に表3に示した。その結果、選択数の多い上位3つを見てみると、3. ねこのピートが22人、8. ベル、5. へんしんマラソンが20人の同数であった。また、「もういちど見てみたい、やってみたいとおもったことを1つだけ」選択してもらった。その結果、8. ベルが最も多く15人であった。

表3 子どもが選んだ良かったこと、もう一度見たり、やってみたいこと(人)

プログラム	良かったこと	もう一度見たり やってみたいこと
3. ねこのピート	22	3
8. ベル	20	15
5. へんしんマラソン	20	3
4. クイズ	18	1
1. おにぎりべんとう	12	1
6. できるかな?	11	1
7. まどからおくりもの	11	0
2. おむすびころりん	10	0

3. ねこのピートが良かったこととして最も多く選択されているが、もう一度見てみたいと回答している子どもは3名に留まっている。3名の選択した理由を記述から見てみると、「おもしろかった。うたがよかった。いえでもうたった。」(1年生男児)「おもしろかったから。」(未就園女児)「うたがおもしろいから。」(1年生男児)と、読み手と聞き手である子どもとが一緒になって歌い、ストーリーが展開していく面白さは一方的な受け身の読み聞かせとは違い、幼い女児や1年生男児の心を掴んだと言えよう。また、子どもは、楽天的とも言える前向きなキャラクターの主人公の猫と共に、もう一度この絵本の世界の中で白い靴の色がどんどん変わっていく面白さを体験したいと考えたのであろう。

次にもう一度やってみたいと最も多く選択された、8. ベルの記述内容を見てみたい。「ベルがきれいな音なのでたのしかったから。」(1年生女児)、「なかなかベルにさわることができないし、たのしいから」(2年生女児)、「たのしかったから。」(年長女児)と、ベルの澄んだ音の美しさや、身近な楽器ではなく普段は触ったり演奏することのできない特別感から楽しさを見出していると言えよう。また、「きれいな音で皆とできてよかったから」(1年生男児)のように、一人が1つの音のベルを担当するが、楽譜に書かれた階名の通りに鳴らすことで1曲完成させられたこと、曲は見える形としては残らないが、「きよしこの夜」といった曲としての形になったことは低学年の子どもにとって、普段、学校で使用しているような鍵盤ハーモニカ等の楽器を使って一人で曲を完成させるのは容易ではないが、ミュージックベルの様にタイミングさえ間違えなければ、特別な練習をしなくても、そこに集まった子ども皆で1曲演奏できたことは魅力的に感じたのであろう。

### 3.3 ワークショップ終了後、子どもが話題にしたこと

保護者にワークショップ終了後、子どもが話題にしたことを記述してもらった。記述の内容をプログラム毎にのべ数で示したものが表4の通りである。

やはり、おもしろかったこととして最も多く選択されていた 3. ねこのピートと、もう一度やってみたいこととして最も多く選択されていた 8. ベルの話題が多かった。記述の内容を見てみると、

表4 終了後話題にした内容とのべ数（人）

プログラム	のべ数
3. ねこのピート	11
8. ベル	10
6. できるかな？	4
4. クイズ	3
2. おむすびころりん	2
1. おにぎりべんとう	1
5. へんしんマラソン	1
その他	1

「ねこのピートは帰り道にみんなでうたいながら帰りました。」（1年生男児）、「ねこのピートは毎日口ずさんでいます。替え歌をして笑ってます。」（2年生女児）、「ねこのピートの絵本がほしいと言われました。」（年中女児）、「歌も毎日口ずさんでノリノリでうたってます。「横井先生が歌の時に足が動いてたよ」」（年長女児）と、絵本の中の歌が気に入り、替え歌したり、そのまま歌ったり、読み手の歌っていた様子を語るなど、絵本の読み聞かせであっても絵よりも歌の方が印象深かったことが読み取れる。

次に多かった 8. ベルについて見てみると、「ベルをもう一度やりたいと言っていました。帰ってからはピアノで練習していました。」（1年生女児）、「きよしこの夜」が楽しかったようで帰ってからピアノで弾く練習をしていました。」（年中男児）と、ミュージックベルはワークショップでしかできないが、これがきっかけとなり、皆で演奏した曲を一人でピアノで弾いてみようとしたり、「きよしこの夜」のドレミを口にしている」（1年生女児）のように、歌って再現するなどして楽しむ姿が見られたことがわかった。また、「ハンドベルいいなと。」（2年生男児）と、体調不良で見学していた子どもも終了後に話していたことから、ミュージックベルの演奏の楽しさが伝わったことがわかる。

少数ではあるが、「できるかな？のロバが気に入ったようで家でもやっていました。」（1年生女児）、「できるかな？でロバの足けるポーズにはまって家でもずっとやっていました。」（2年生女児）と、絵本の中に出てきた動物の動きを真似て遊んだり、「クイズがたのしかった」（1年生女児）、「クイズなど大好きなので話していました。」（2年生女児）と話題に上がったことがわかった。また、「昼休みでいただいたおにぎりが美味しかったことばかり話していました。」（1年生男児）の様に、普通のおにぎり弁当であっても、初めての場所で初めて会った子どもたちばかりと一緒に食べたおにぎりの味はワークショップの印象とあいまって格別であったと思わせたのであろう。そして、「朗読のマネや妹に読み聞かせをしました。先生たち、お兄さんお姉さん大学のことも聞いてました。」（2年生女児）と、自分も実践者たちの様に読んでみたいと思ったことや、大学や大学生に興味を持ったことがワークショップ終了後の話題から読み取ることができた。

### 3.4 プログラムの内容について

次に本研究対象のワークショップの教員の実施したプログラムについて考えたい。

国語科教育を専門とする滝浪は「まどからおくりもの」を読み聞かせ、そこでは子どもたちが発した言葉を拾い上げて返答して読み進めた。

算数科教育の専門の宇野は直前に読まれた「ねこのピート」の絵本の中からクイズを出した。スケッチブックに書かれたクイズ問題を見ながら子どもたちは回答した。そのクイズは前述の通り、オープニングの問題が出された。

保育内容「表現」を専門とする筆者は「ねこのピート」の絵本を、どの子どもも大きな声で答えやすいように問いかけ、リズムカルに読み進め、さらに主人公が毎ページ歌う歌を子どもたちと共に歌いながら進めた。また、ミュージックベルでは保護者が同伴していることから、階名を色分けした譜面を用意し1枚ずつ配付、保護者に手伝ってもらいながらベルを鳴らすことができたようにした。

3名の教員はそれぞれの専門の特徴を活かす形でプログラムを計画し実践した。参加者募集のチラシには、「国語・算数・音楽表現の専門家によるワークショップです。」と記載してあったので、保護者は本ワークショップが実際には読み聞かせ中心のプログラムであったので、クイズに算数の要素が含まれていることや絵本をリズムカルに身体を動かしながら見る、問いかけに答える、歌うことが音楽的であることにはなかなか気付くことはなく、ベルの前まで参加した保護者のアンケートの感想には「国語、算数、音楽表現の専門家によるワークショップ」ということで参加しましたが、読み聞かせの国語の部分しか体験できず残念でした。大人の私でも読み聞かせが続くと少しあきってしまうので、読み聞かせの間に、音楽や算数要素を入れたらどうかと思いました。」(1年生男児)というものがあった。しかし、その一方で「一つ一つが短くテンポがよかったですので夢中になっているのがよくわかりました。参加するものが多く飽きずに楽しんでいました。」(1年生女児)や、「年齢が小さいので参加させても楽しめるかと思いましたけどお姉ちゃん達と一緒にやり本人もとても楽しそうにやっていました。小学生から未就園児まで楽しめる内容でとてもよかったです。」(未就園女児)「4年生で楽しめるだろうかと不安を抱きながらの参加でしたが、予想に反して大変楽しんでいました。」(4年生女児)、「年齢(学年)に関係なく、みんなが楽しめる内容でとても良かったと思います。」(年中女児)との感想があった。また、子どもの感想に「クイズのこたえがいっぱいあってうれしかったです。」(1年生男児)や「クイズがいろいろ考えられて楽しかった。」(1年生女児)、「クイズが楽しかった。頭でいろいろ考えたから。」(1年生男児)と、考える楽しさを感想として挙げている子どももいた。これは、子どもたちが本プログラムに受け身ではなく、主体的に参加していたことがわかる感想と言えよう。

学校の授業のように時間の区切りで科目、内容が替わっていくのではなく、本ワークショップの様に、それぞれの専門のねらいを持ちつつ絵本の読み聞かせを中心としたプログラムを実施し、参加者は一貫してただ、目の前に出されたものを主体的に楽しむ、という保育的な活動であった。こういった活動の考え方が、低学年の子どもたち対象のワークショップでは重要であると言えよう。



#### 4. まとめ

国語科教育,算数科教育,保育内容「表現」それぞれを専門とする教員が保幼小連携を意識してワークショップを実施した結果,以下のことが明らかになった。

- (1) 絵本の読み聞かせを中心としたプログラムは,絵本に含まれる様々な内容によって,リズムカクに読み進めたり一緒に歌ったりして子どもに表現的な刺激を与えることに繋がる。
- (2) ミュージックベルのようなタイミングを合わせて演奏しなくてはいけない楽器を使用することで,初めて会った子ども同士であっても音楽を通して皆で息を合わせることは楽しいと感じられ,皆でやることの楽しさを味わうことに繋がる。
- (3) 参加する子どもの姿を通して,小学校の教科教育と保育の教員がお互いの教育内容や方法を理解することに繋がる。
- (4) 低学年の子どもたちの活動においては,教科や活動を区切るのではなく,保育的アプローチでボーダーレスな大きな流れの中で,エッセンスを大切に活動プログラムが有用である。

以上ワークショップに参加する子どもの様子や,終了後の保護者と参加者アンケートからワークショップにおける教員によるモデル提示の有用性とプログラムについて検討してきたが,共にワークショップの実践者として参加した学生たちにとって,目の前の子どもの生き生きとした反応は教員の示すモデル以上のものがあったに違いないが,教員の考えたプログラムによって子どもの反応が起こると考えれば,やはり教員によるモデル提示は有用性が高いと言えよう。本研究では,アンケートの結果を中心に考察してきたが,本実践からの学生の学びについての結果の検討と活動内容を,もう少し各教科の学びにつなげていくことも今後の課題となった。

#### 謝辞

ワークショップに参加してくれたお友だちと,連れてきてくださった保護者の皆様,アンケートへのご協力にも感謝致します。

#### 引用・参考文献

- 1) 文部科学省2017『幼稚園教育要領』
- 2) 厚生労働省2017『保育所保育指針』
- 3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省2017『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』
- 4) 文部科学省2017『小学校学習指導要領』
- 5) エリック・リトウィン2013『ねこのピートだいすきなしろいくつ』ひさかたチャイルド
- 6) 坪田耕三2006『算数楽しく オープンエンド』教育出版株式会社
- 7) あきやまただし2005『へんしんマラソン』金の星社
- 8) エリック・カール1997『できるかな? あたまからつまさきまで』偕成社
- 9) 五味太郎1983『まどからおくりもの』偕成社